



## 夏目漱石の病歴と生活（七）

広島文化学園大学大学院看護学研究科

森下恭光

### ■ 緒言

第七稿となる本稿の主題は、大正三年の年始より大正四年の末日に至る二年間に見られる夏目の病歴と生活の実態を明らかにすることにある。この間の病歴としては、大正三年九月発病の胃病と同年に見られた夏目が「神経衰弱」と呼称する精神面の不調、そして、大正四年に京都旅行中に発病する胃病があげられる。

また、生活面では小説「こゝろ」の創作とその前後期の大正三年中における夏目の生活状況と大正四年における随筆「硝子戸の中」、小説「道草」の執筆活動、創作活動そのものとその基盤になる生活状況を究明する。

これらの作業の資料は、夏目自身により書かれた書簡、日記及び断片、作品を始めとして、夫人、友人、門下生などの談話、著述が主なものとなる。

### ■ 大正三年前半の夏目

前稿（「夏目漱石の病歴と生活（六）」）に論及した千谷七郎の説、すなわち、夏目の内因性鬱病の第三回目は大正元年晩秋より二年、三年にわたる。<sup>1)</sup>とする説にしたがうと、大正三年はその時期の中にある。そのことを証するもの、あるいは記述を日記・断片、書簡によって確かめると、その顕著な事例をあげることは、少なくとも三月まではできない。

日記・断片は十月三十一日付の記述までは年始より全く欠落している。書簡については、二月末迄に発信されたものでは、一月十四日付で発信した戸川明三宛の書簡に、「拝啓其後は久しく御目にかゝりません御健勝の事と存じます私も変わりはありません。後略。」<sup>2)</sup>とあるのが唯一自身の健康に触れる内容を含むものとしてあげられるに過ぎない。

しかし、三月になると、不調を訴えていると解される書簡が見出せる。三月二十九日付で画家の津田亀次郎（青楓）に宛てた書簡に「前略。私は馬鹿に生まれたせいか世の中の人間がみんないやに見えます夫から下らない不愉快なことがあると夫が五日も六日も不愉快で押して行きます、後略。」<sup>3)</sup>とあるのは、自己の性格分析をしながら不調を訴えているものと見てよいであろう。

また、四月十四日付で寺田寅彦に宛てた書簡には、「前略。小説も書かねばならぬ羽目に臨みながら日一日となまけ未だに着手不仕候是も神経衰弱の結果かも知れず厄介に候、後略。」<sup>4)</sup>との内容が見られ、ここでは「神経衰弱」の語を用いて自身の身心の状況を説明している。これらの事例を踏まえてか、荒正人は、「三月、四月頃、依然として神経衰弱である。」<sup>5)</sup>としているが、「依然として」という語句に注目するならば、それ以前から継続していることを意味するが、論拠は示されていない。

ところで、書簡の文中にある「小説」とは、夏目が東京朝日新聞社の山本松之助宛に発信した三月

三十日付の書簡に、「前略。予告の必要用上全体の題が御入用かとも存じます故それを「心」と致して置きます。後略。」<sup>6)</sup>と記していることにより、大正三年四月二十日から八月十一日まで連載されることになる「こゝろ」であることがわかる。そのことから夏目が「こゝろ」を執筆したのは四月十四日～四月十九日の間と推定される。

夏目にとって小説執筆という作業がいかに負荷の高いものであったかを伝える事例として、門下生の内田百閒は、「夏目漱石先生が、新聞連載の仕事にかかると、初めの内はそれ程でもないけれど、日がたつに従って、段々機嫌が悪くなる。」<sup>7)</sup>とその模様を伝えている。ただし、内田の記述は「心」を執筆中の夏目と限定してのものではない。

なお、夏目にとって最も近い存在である夫人の鏡子は、「こゝろ」執筆時の夏目については、とくに心身の不調に限ると、目立つ回顧はしていない。

既述したとおり、夏目自身は不調を訴えていることを考えると夫人と夏目の意識のずれともいえるべき事例として見るができる。

さて、前稿において論及した夏目の画作、そして画家の津田との関係を見ると、画作も津田との交流も依然として続いていることが確認される。

四月十日付で津田に宛てた書簡に、「前略。画もいやになる迄かいて夫から又文学なり批評なりに移って行きたいと思ひます小説ももう書き始めなければなりません、夫で画はやめました、後略。」<sup>8)</sup>と書き送った二週間余り後の四月二十六日付の津田宛の書簡には「前略。あの竹の画には実際恐縮しましたあれ程まづいとも思ひませんでした近いうち何か御気に入るもののかいて取替たいと思ひます、後略。」<sup>9)</sup>とあるところを見れば、画作が継続中であり、画作の指導者ともいえるべき津田との交流も親密に継続していることが確認される。

四月十日付の書簡では「画はやめました」と書きながら同月二十六日付の書簡では画作の継続を暗示していることによっても、夏目の日常における画作の占める位置の大きさを知ることができる。

四月二十日より連載の始まっている「こゝろ」の執筆というまでもなく夏目の本来の仕事であるから趣味で行う画作と異なり最も精力を注集することになったのは当然で、夏日はこの作業を午前中に行うことを習慣化していた。

そのことは、五月十四日付で林原（当時岡田）耕三へ宛てた葉書の文面にある「午過は大概小説をかいてしまっていますから会えるでしょう、後略。」<sup>10)</sup>とあることによっても確認される。

しかし、その習慣化されていた午前中という執筆時間も安定的に確保されていたか否かについての確認は得られない。六月九日付で野上豊一郎に宛てた書簡に「前略。私は咽喉が急にはれて熱がでました三十八度五分程出ました夫で久し振りに床をとって寝ていました、後略。」<sup>11)</sup>とある文面からは執筆への影響を測ることはできない。また、同日に門馬春雄に宛てた葉書には、さくらんぼうを送ってもらったことに対する礼状が遅れたことを詫げる文言「前略。二三日風邪で寝ていましたので御礼を出しませんでした以上。」<sup>12)</sup>が見られる。

さらに、同日付で島根県の全昌寺に住する若き禅僧に対しては自身が病床にあることを告げた上で、相手の胃病を気遣い、「前略。良く療養なさい、後略。」<sup>13)</sup>と激励している。

このことよって知り得ることは、自身が病床にある時においても、3通もの便りを発信する気力を示しているという事実である。

このことから、先に述べた執筆への影響ということを取って推測するならば、夏日は病床にあっても、もちろん病気の種類や程度によるとはいえ、無理のきく範囲ならば執筆の時間を確保することを最優先させたであろうと思われる。

六月二十五日付で森次太郎に宛てた書簡に、「前略。近頃は午前中に原稿を書く癖がついているので夫を怠ると心持がわるくって仕方がない、後略。」<sup>14)</sup>とあることによっても、当面の活動である「こゝろ」という作品の新聞連載に支障を生じさせないようにすることに義務感、責任感を抱き、いわば万難を排して創作に取り組むという気構を見せている。

その「こゝろ」は休みなく連載されて行くが、七月九日付で朝日新聞の佐藤真一に宛てて、「拝啓小生小説『こゝろ』の校正につき一寸申上ります。」<sup>15)</sup>と前置きして、てにをはを原文と変えたり、字を変えた

りすることの不都合を述べ、校正を責任をもってやってほしい旨要求し、もしそれが出来ないのであれば自身で行うことにする。とも伝え、返事を求めている。

同書簡には、「小生の書いたものは新聞として大事でなくとも小生には大事であります。」との文言が見られるが、<sup>16)</sup> この文言に見られるとおり、夏目にとっては創作という執筆活動は自己という存在をかけた活動であったのである。この要求に対する処置は、早速に行われたので、翌日の七月十日には、早速の対応について礼を述べ、あわせて強く責めたことに対して詫びている。ここに見られる夏目の課題に対する対応と、その結果に対する処置には彼独特のものが見られる。

つまり、課題は放置せず対応し、その結果に対し、それが他者にかかわるばあい結果に対する評価を誠実に行うというのがそれである。

「こゝろ」の執筆は八月一日に脱稿となり、新聞連載は八月十一日で終了する。百十回の連載ということになる。

なお、夏目が「こゝろ」を執筆中の大正三年（一九一四年）七月二十八日、第一次世界大戦<sup>17)</sup> が起こり、日本は同年八月二十三日に参戦する。

夏目のこの件についての反応は八月十九日付の山本松之助宛書簡と八月二十五日付鬼村元成宛の書簡に見られるが、予想に反して強い形ではあらわれていない。とくに、鬼村宛の書簡には、「前略。戦争が始まりましたたまにはあんな事も経験のため好かろうと思います欧州んものどもは長い間戦争を知らずにいますから。後略。」<sup>18)</sup> とあることに見られるように冷静に、しかも批評家的態度で受け止めている。

## ■ 小説「こゝろ」と夏目の心

「こゝろ」<sup>19)</sup> は前述の経過をたどって創作された夏目の晩年の作品である。作品に登場する主要人物は、先生、「私」、「先生」の奥さん（名は静）、K、奥さん（静の母）、「私の父」であり、作品における位置と比重は圧倒的に先生と「私」にかけられており、更に言えば、先生が突出している。「こゝろ」の内容の量的面での大きな部分を占めるタイトルが「先生の遺書」になっていることにその象徴がる。

三好行雄は、このことを「先生の遺書を予定以上に長文化させ、あえて一篇の均衡を損なうほどの比重をそこに与えたのは、みずからの創造した人物像にのめりこむ、漱石の過剰なまでに切実な自己投影の痕跡である。」<sup>20)</sup> ととらえている。

また、森田草平は、「『こゝろ』を見ると、これは私の一人合点かも知れないが先生はその「先生の遺書」の中で、そうして作中の人物の小説以前の歴史を今度は極めて自然に、（筆者注 前作の「それから」、「門」に比べて）誰も納得せずにはいられないように書き替えていられるのぢやないかと云うような気がする。」<sup>21)</sup> と「先生の遺書」の展開に見られる前作に見られない特性を指摘している。

さらに、伊豆利彦によれば、「先生の遺書には、決してありのままの自己を告白出来ない自分の気持ちに従って行動することが出来ず、頭の中でこしらえた観念に縛られ、現実を犠牲にするのです。」<sup>22)</sup> として、主人公である先生の性格の分析を行っている。

小宮豊隆は「こゝろ」を「言わば漱石の全生活を賭けたエキスペリメントであって、漱石の「行人」に於けるエキスペリメントが、一郎が自分は正しいと感じる方面で、徹底的なエキスペリメントが行われているのに対して『こゝろ』では先生が、自分は罪のかたまりであると感じる方面で、徹底的なエキスペリメントが行われているのである。」<sup>23)</sup> と解説し、「こゝろ」のとらえ方を提示する。

前稿において千谷七郎が夏目を内因性鬱病患者であったとする論拠を「行人」の主人公長野一郎の行動分析によって求めたことを論じたが、ここでは、主人公の分析はその遺書によって行われることになる。そのばあい、先生の遺書に語られる先生の自己分析ともいうべき内容から知り得るものは何か、と考察するばあい、他者からはもちろん自分自身でもとらえ切れない不明な自己、それ故に孤独な自己という存在の認識という事態が見出される。自分自身によってさえ理解し難い自己という存在、そして、そのような存在の働きを象徴するのが「こゝろ」である、と夏目が考えたとすれば、作品のタイトルを「こゝろ」とした動機、背景が理解されるのではないか。

八月九日付で橋口貢に宛てた書簡「前略。私は今度の小説の箱表紙見返し扉一切自分の考案で手を

下してやりました、後略。』<sup>24)</sup>とあることによって、夏目のいう今度の作品「こゝろ」に込める思いの強さが知られる。

「こゝろ」の連載も終了し、心身ともに一段落したかに見える頃の八月二十二日に夏目は津田に宛て、書簡を送っている。前回発信したのは七月十一日であったから1月以上も経過している。これだけ間が空いたのは、その間に執筆活動が全勢力を注集して行われたことを証するものと考えられる。

この、いわば久しぶりに送る書簡に、気心の知れた相手でもある津田に対して「前略。何だか気分がわるいので出る気になりませんたゝ動くのがいやなのです、後略。』<sup>25)</sup>と不調を訴えている。このばあいの不調は体調の不調であろう。しかし、書簡の発信通数や内容を見る限り特別の変化は少なくとも九月七日までは見られない。多い日には1日に3通書き送っていることによってそれは確認される。

しかし、九月七日を過ぎると、その次の発信日は九月十六日付となっており、笹川種朗宛のその書簡には、「病気の御見舞状をうけ難有存じます 今日やっと起き上って此手紙をかきます 床はまだ上げず 然し今度のはいつもの病気ではなくひどい胃カタルです、後略。』<sup>26)</sup>とあることによって、この書簡を発信する前の何日かに発病し、現在も病床にあることが判明する。荒正人によれば、発病は九月八日と推測される。<sup>27)</sup> 発病日は少なくとも九月七日以降であるとして次の発信日を見ると九月十六日の次は十月十七日となっているので1月以上にわたる病床生活を送っていることが確認される。十月十七日付の中勘助宛の書簡に「君は知るまいが僕は其後煩（ママ）ってまだひよろひよろしている、後略。』<sup>28)</sup>とあるところによってまだ治癒の段階に至っていないことが察しられる。この日、この状態にあるとはいえ、夏目は中勘助、小池堅治、秋山真澄、野坂十二郎に宛て四通発信している。しかも、その内容は緊急性を帯びたものという程のものはない。そこに夏目の特性、すなわち可能なかぎり求められている返信は発するという義務感、責任感の強さが見られる。3日後の十月二十日にも4通発信していることによってもいよいよその特性の顕著な発現を見ることが出来る。

夏目の床上げの日を特定することはできないが、十月二十七日付の中勘助あての書簡に「病気はまあ癒りました。』<sup>29)</sup>とあることによってこの時点で床上げは終わっていると推測される。深刻な事態には至らなかったとはいえ、日常生活を送る上で不便を来す事態であったことは否定できない。

このことについて夫人の鏡子は、「この大正三年に又もや胃を悪くして一月ばかり床につきましたが、いい按排に大したことにもいたりませんでした。中略。修繕寺大患（注 明治四十三年八月二十四日 - 大吐血）以来というもの年百年中薬を離れたことはございませんでした。』<sup>30)</sup>と回想している。昭和三年に行われた回想であり、十五年程経過していることを考慮にいれても夫人の回想は実感をともなうものとして状況の理解をする上で有力な資料となるであろう。

夏目の胃病は以上に見たとおり一応落ち着くことにはなるが、この時期、夏目の死生観の表出が顕著になされる事態が発生する。そのことは、門下生の松浦嘉一が木曜会（注 明治三十九年十月十一日より開始の夏目宅で木曜日三時以降に開催の面会日）を回想した談話の中で大正三年十一月十二日の日記を引用し、「先生は比頃早く死にたいというようなことを言われる。中略。「死が僕の勝利だ、中略。死は僕にとりて一番目出度い、生の時に起ったあらゆる幸福な事件より日出度いから。』<sup>31)</sup>と語ったことを紹介している。また、その常病（胃病？）が肉体上、非常な苦病であることを訴え、その肉体上の苦痛を逃れるために、死んでもよい位に思ったこともあるとの談話もあったことを言い添え、さらに続けて「このライフ、人々が云々する理想とか、リズムとか、哲学とかいうものは、死に比べたら、吐けば飛ぶようなものだね。けれど死は絶対です。死ほど人間の掴み得るものゝ中で確かなものはない。』<sup>32)</sup>とも語ったことを伝えている。

夏目は同じ趣旨のことを十一月二十六日の木曜日会でも語ったことを松浦は日記に書き留めている、<sup>33)</sup>と述べているので、この過激な発言が単なる思いつきや坐興でなされたものでないことは明らかである。そのことは十一月十四日付で林原（当時岡田）耕三に宛てた書簡に「私が生より死を択ぶというのを二度もつづけて聞かせる積ではなかったけれどもつい時の拍子であんな事を言ったのです然しそれは嘘でも笑談でもない、後略。』<sup>34)</sup>とあることでも確認される。松浦、林原に限らず木曜会に出席していて、この夏目の談話を直接聞いたものは恐らく一様に驚いたであろうことは容易に想像される。この時期、健康状態にかんする懸念が主要因となって、過激とも言える夏目の死生観は形成されていたと考えられる。

なお、先に引用した夏目の病床生活についての夫人の談話（回想）には全く触れられていないことで夏目の内面生活を推測させる資料となるものとしては、日付を記さずに残されている記録が「断片」として全集に収録されている。そこでは夫人や使用人、医者、看護婦に対する不満や不快感が露骨なことば、表現を用いて記されている。それは単なる不平や不満の吐露というより、口を極めた非難というべきものであって、読むに耐えない程痛切で悲愴なものとなっている。<sup>35)</sup> 時期を特定できない断片の内容ではあるが、それが夏目の死生観と無縁なものであるとは思われない。

十一月二十五日、学習院輔に仁会<sup>36)</sup>の依頼を受け、「私の個人主義」<sup>37)</sup>と題し講演する。

前述のとおり、この時期の夏目はその死生観に象徴されるように、平穏な心境にはなかったが、講演の趣旨には死生観に見られる激越な調子は見られない。特権階級に属する親とその子弟を意識して、夏目は個人主義の真の意味を説く。すなわち、個人主義とは相互関係としてとらえるべきで、本来的にはお互いにとっての個の尊重がなされるもので、一方的な自己の主張は許されない。それは、権利と義務の関係としても説明される。互いにとっての自己-個人の尊重を旨とする個人主義を夏目は「党派心がなくて理非がある主義」<sup>38)</sup>と言い換えている。それ故に、この主義は、結果として「ある時ある場合には人間がばらばらにならなければなりません。其所が淋しいのです。」<sup>39)</sup>とも述べる。ここにある「淋しい」という情緒的用語は「理非がある主義」としての個人主義にとっては本来なじまない言葉であるはずである。にもかかわらず敢えて用いているところに当時の夏目の心境を象徴するものがあると考えられる。

この年も末に近い十二月三十日付で勝又和三郎に宛てた葉書に「ミカンをありがたく頂戴しました御礼を申上ます序だから申しますが私は文学博士ではありません」<sup>40)</sup>と書き、増物に対する御礼を述べた後で宛名に付されていたと推測される「文学博士」という肩書に傍に○を付けて訂正をしているところに明治四十四年に博士の学位辞退に見せたこだわりの継続が見られ、同時にこの件へのこだわりの強さに夏目の特性をうかがうことができる。

## ■ 随筆「硝子戸の中」と京都旅行

前稿でとり上げ紹介した千谷七郎による夏目の内因性鬱病の第三回目は大正三年で終息するとの見解に従えば、大正四年は安定期にあたる。ところが大正四年冒頭の一月一日付で寺田寅彦宛に送った年賀状には、「今年は僕が相変わって死ぬかも知れない。」<sup>41)</sup>とある。賀状の内容としては一般論から言えば不吉であり、異例のものになるが、相手が多病の門下生である寺田であることを考えれば、同じく多病な自身を「相変わって死ぬ」身になるかも知れないという程の意味の「同病相憐れむ」心情の発露として解釈するのが妥当であろう。

一月四日、「硝子戸の中」<sup>42)</sup>の執筆を開始する。随筆というべきこの小品は、一月十三日より二月二十三日まで39回にわたり連載される。内容に一貫性はなく、従って主張すべき思想とか信念が底に貫かれているわけではない。しかし、小説のばあいと異なり、登場人物の行動をかりて何かを表現し、伝達するのではなく、このばあい主語は常に私、夏目であるから、或る意味では夏目の思想や感情の率直な表現であり述懐であると言ってよい。

39回にわたって書かれたもの、中でとくに注目されるのは、夏目の出自に関するもので、親と養家のことに触れた「二十九」、兄弟のことを書いた「三十六」、そして、最も感情の込められた「三十七」と「三十八」があり、ここでは母千枝について、そのわずかな印象を基として、詳細に、しかも情緒的に書くことを通して愛惜の念を表明している。最終回の「三十九」で夏目は、「私の書いたものは懺悔ではない。」<sup>43)</sup>と記し、それが本当の事実ではない、とことわっている。言うまでもなく懺悔は虚偽であってはならないが、夏目からすれば虚偽には2種類あり、意識としての虚偽と意識しない虚偽が存在する。したがって「硝子戸の中」の読み方も単純には行かない。

とはいいいながら文末に「家も心もひっそりとしたうちに、私は硝子戸を開け放って、静かな春の光に包まれながら、恍惚と此稿を書き終わるのである。そうした後で、私は一寸腕を曲げて、此縁側に一眠り眠る積である。」<sup>44)</sup>と、いかにものどかな雰囲気の中で稿を終える感慨を記している。

三月十八日付で朝日新聞社の山本松之助宛に書簡を送り「私は一寸旅行致します今月一杯には帰るつもりです。」<sup>45)</sup>と告げている。旅行の行先は記していない。翌日三月十九日、夏目は京都に向けて東京駅を発つ。京都では津田青楓が迎える。夏目の京都行は鏡子が津田に夏目を旅行に誘って京都で遊ばせるよう依頼したことによることを鏡子自身が打ち開けている。<sup>46)</sup>鏡子の回想によれば、夏目が朝日新聞の山本に行先を告げなかったのは「何の目的もないまったくの呑気な遊び」<sup>47)</sup>であったからということによる。

京都の宿泊先は津田の兄（西川一草亭）らが決めた「北大嘉」<sup>48)</sup>である。そして、翌日には祇園の「一力」<sup>49)</sup>へ赴き「大石忌」などを見物した後、「大友」<sup>50)</sup>、「大丸別荘」を見学するが寒さも影響したのか「腹いたし。」<sup>51)</sup>と日記に記す。宿に帰った夏目はその日の晩食に「大友」の女将磯田多佳<sup>52)</sup>を呼ぶ。

京都到着の翌日には胃の不調を日記にも記したとは言え京都見物と食事、買物、そして磯田多佳との交流は活発に行われ、連日のようにその内容を日記にかなり詳細に記しているところを見ると、夏目がこの旅を楽しんでいることが如実にうかがわれる。しかし、胃の不調について連日日記にも記す夏目に、二十五日、姉危篤の報せが来る。これに対して、「帰れば此方が危篤になるばかりだから仕方がないとあきらめる。」<sup>53)</sup>と日記に記す。翌日には医者が呼ばれ、二十八日には医者より人工カル、スをもらう。<sup>54)</sup>連日記して来た日記も二十六日より二十九日までは記述量が日毎に減り、ついに二十九日以後四月八日まで日記は記されない。

四月一日に鏡子夫人に津田青楓の指示で京都に来てほしい旨の電報が打たれ、二日には、鏡子夫人は京都の夏目のもとに到着する。しかし、京都に到着した後の鏡子夫人の様子に切迫したものは見られず、連日のように京都見物をしている。鏡子夫人の回想によれば、「病気は例によっては例のとおりなもの」<sup>55)</sup>といった程度のものであったらしく、夏目は休息をとりながら依頼に応じて書画を相当量制作していたのを夫人は見届けている。<sup>56)</sup>四月十六日に京都を発つことになるまでには夏目の健康はある程度回復し、夏目と鏡子は寝台車で東京へ向かい、翌日の十七日に帰宅する。そして、次の日（十八日）から京都でお世話になった人達への礼状と留守中の着信書簡に対する返事を書き始め、十九日付の書簡は夏目自身の申告によると18通に及ぶ。（筆者注、全集に収められているのは11通）以後、ほゞ連日のように書簡を各方面に送っており、平常のペースをとり戻して行くことになる。このようにして、ほゞ1ヶ月の京都滞在は、胃の不調はあったにもかかわらず、それを上廻る喜びや楽しみを経験する機会になった。

## ■ 「道草」が伝えること

約一ヵ月にわたる京都滞在を経て自宅に落ち着いた夏目は、五月の半ば頃までは身の日常的作業（書簡の発信）に日を送りつゝ、その時期は明確ではないが、小説執筆の準備にとりかかる。小説「道草」が東京・大阪の「朝日新聞」に連載されるのは、大正四年六月三日に始まり同年九月十四日まで全百二回にわたる。

「道草」<sup>57)</sup>に登場する主要人物としては、主人公の健三（大学講師）、御住（健三の妻）島田平吉（健三のかつての養父）、島田常（健三のかつての養母）、比田夏（健三の腹違いの姉）、長太郎（健三の兄）、比田寅八（健三の姉の夫）があげられる。

この小説に物語性は見られない。それは夫人の鏡子が「これは主に私どもの千駄木時代」<sup>58)</sup>に起こった一寸した事件を題材にとりまして、それに自分の昔の記憶などを結びつけて書いた、いわば自伝的小説とかいうものでしょう。この中に私はじめ親類のものなどが出て参ります。<sup>59)</sup>と回想していることにもみられるとおり自伝的小説のカテゴリに属するもので、その解釈は多くの評者も認めるところである。正宗白鳥も「この小説は彼れ（筆者注、夏目）の自叙伝らしく思われる。」<sup>60)</sup>ととらえている。

「自伝的小説」と「自叙伝」は厳密に言えば異なるが、いずれにしても作中の人物、事件、時代等について多くの符合する事実が見出せるという性質を持つことは共通する。そのような観点で見ると、中心人物の健三はその職業、経歴、家族関係、血縁関係、生育暦など多くの点で夏目のそれらと一致する。他の人物についても容易にそのモデルを特定できる。そのことにより、読者は、無意識の中で、そこに描かれていることを事実そのものと見なし、それぞれの人物像を夏目の描いた人物像を模写する形で造

形していくであろう。しかし、小説ではいかにそれが事実に基づくものであっても事実そのものではないことを押さえた上でこの作品は扱われなければならない。

三好行雄は「健三は漱石ではない。漱石の実生活にまで還元して健三を解くのは容易すぎる。漱石は健三を神の眼で見て、〈作者／作中人物〉の関係でたえず相対化しながら語りつづける。」<sup>61)</sup>と、その読み方、とらえ方のあるべき方向を提示している。

大岡昇平は作家としての立場から『道草』の記述をそのまま信用するのは、僕は賛成できないんです。自伝というのは非常に粉飾するものですからね。」<sup>62)</sup>と三好との対談の中で述べている。

「道草」の家族への影響という点について見ると、それが自伝的なものであるということにより現実問題としてあり、夫人の鏡子は、「あんまり家のことや人のことを書くのは感心しないとか何とか言ったものです。」<sup>63)</sup>と回想の中でそのことに触れている。

「道草」の執筆は、夏目にとっても決して円滑に行われたものではないことは、他者による回想にも見られる。内田百閒が夏目の書斎に据えられた机の脚の外側に積み重ねられている原稿の量が増えて行くのを見て、夏目に「あれは何ですかと尋ねて見たら、欠き潰しが溜まったものだよと云われた。」<sup>64)</sup>ことを記している。その量は次第に増えて行き、目立つ程の量になったことを見届けている。書き潰しの原稿が溜まっていくということにより、夏目の執筆の姿勢がうかがわれる。書き潰し原稿の量が多かったことについて荒正人は総量がほぼ二百数十枚位あったらしい、<sup>65)</sup>と記す。

九月上旬に「道草」を脱稿する。連載の終わった九月十四日以後は身心ともにゆとりが発生するはずであるが、この時期に発信した書簡によってそれを確かめると、そのことを示す明らかな痕跡は見当たらない。九月三十日付で、菊池謙二郎（水戸高等学校教員）に宛てた書簡では依頼された講演を断り、理由として、「中々遠方へ出掛ける勇氣も余裕も時間も根もありませんからどうぞ御勘弁を願います小生は旅行するといつでも病気をします今春も京都へ行って寝ましたまあ廢人の部に属すべき人間です。」<sup>66)</sup>と記し、弁解している。旅行の度に病気になると言われれば強いて依頼することは出来なくなる。しかし、京都と水戸では距離が違い、水戸へ赴くのを遠方への旅行と言うのは不自然である。とにかく働きたくないという気持ちを表現したものと解釈される。

その夏目が旅行することになったのは、十一月九日のことである。鏡子夫人によれば、中村是好に誘われ<sup>67)</sup>てのことらしい。中村は学生時代からの親友であり、明治四十二年、四十五年、大正元年と旅を共にしているので、夏目にとって、中村は旅の伴侶として最もふさわしい相手であったから、誘いを受けて、迷うことなくそれに応じたものと思われる。行先は湯河原で、旅行のことは十一月八日付の山本松之助（朝日新聞社員）宛の書簡で「私は明九日から約一週間ばかり伊豆の湯河原の方へ旅行を致します。」<sup>68)</sup>と伝えている。

十一月十七日に及ぶ1週間、夏目は親友とともに文字どおり旅行を楽しみ、そこで得た見聞などを連日のように日記に書きとめている。十一月十四日の日記には、滞在先の天野屋の老主婦から聞いた食い逃げの話を書きとめ、<sup>69)</sup>いかにも寛いだ旅であることをうかがわせる。そして、この度の旅行で最も注目されるのは、日記の内容に自身の体調や気分（感情）に関するものが皆無であるという点である。そのことが象徴するように夏目にとってこの旅行は快適で休養になるものであった。帰宅後の夏目やその身边には、とくに目立ったことは発生していない。健康面でも格別の変化がなかったことは、当該時の日記・断片・書簡、そして夫人による回想によっても容易に確認できる。

平穏な日々を送っていたことをうかがわせるものとして、十二月二日付で画家の島崎友輔へ宛てた書簡に「平常は木曜日を面会日と極めて居ります只今は何も毎日書きもの御座いませぬから木曜日なら朝から人々に御目にかゝる事に致して居ります。」<sup>70)</sup>とあることによって当時の日常が平穏であったことを知ることができる。ここにある木曜会は夏目の日常が多忙になり研究・創作その他の活動に支障が生じるようになった明治三十九年十月中旬に、木曜日の午後三時以後を面会日といたことに始まったものであることは即述のとおりであるが、午後三時以後という枠を外していることに当時における夏目の身の状況が決して繁忙を極めるものではなかったことを伝えている。さらに、この木曜会に見られる変化をあげるならば、この時期になるとメンバー構成に変化が見られ、主要メンバーである門下生、友人の他に若きメンバーとして芥川龍之介、久米正雄の2人が大正四年十二月に加わったことが知られている。

この年最後に夏目が送った書簡は十二月九日付の江口渙宛で内容は江口と岡田耕三の結婚を祝す内容となっており、<sup>71)</sup> 夏目におけるこの年の終りを象徴するものとなっている。

## ■ 結言

本稿によって明らかにし得た点として、次のことがあげられる。

まず、病歴については大正三年に約1ヵ月にわたる胃病による病床生活を送ったことを確認し得た。但し、医師による診断がどうなされたかは判明しない。また、同年における内因性鬱病については医師による診断はもちろん、夫人による病状の指摘も明確にはあらわれていない。大正四年の京都旅行中の胃病については医師による処方を受けているが診断がいかなるものであったかは不明である。

生活面については、大正三年の小説「こゝろ」、の執筆とその後に見られる書画の世界への没入。そして大正四年の随筆「硝子戸の中」と小説「道草」は、夏目の内面の表出が書画への没入や創作、執筆活動という形をとるといふ実態をとらえることができた。

## 注

- 1) 千谷七郎, 漱石の病跡, 勁草書房, 1968年, 44ページ。
- 2) 夏目漱石, 書簡, 漱石全集第三十一巻所収, 岩波書店, 1980年, 10ページ。
- 3) 夏目漱石, 書簡, 同前書, 25ページ。
- 4) 夏目漱石, 書簡, 同前書, 27ページ。
- 5) 荒正人, 増補改訂漱石研究年表, 集英社, 昭和59年, 769ページ。
- 6) 夏目漱石, 書簡, 全掲書, 25ページ。
- 7) 内田百閒, 私の「漱石」と「龍之介」, 筑摩書房, 1975年, 13ページ。
- 8) 夏目漱石, 書簡, 前掲書, 26ページ。
- 9) 夏目漱石, 書簡, 同前書, 30ページ。
- 10) 夏目漱石, 書簡, 同前書, 31ページ。
- 11) 夏目漱石, 書簡, 同前書, 37ページ。
- 12) 夏目漱石, 書簡, 同前書, 37-38ページ。
- 13) 夏目漱石, 書簡, 同前書, 38ページ。
- 14) 夏目漱石, 書簡, 同前書, 39ページ。
- 15) 夏目漱石, 書簡, 同前書, 41ページ。
- 16) 夏目漱石, 書簡, 同前書, 42ページ。
- 17) 1914年(大正三年)7月28日に始まり1918年11月11日までつづく。世界の強国のすべてが参加した最初の世界戦争。
- 18) 夏目漱石, 書簡, 前掲書, 65ページ。
- 19) 夏目漱石, こゝろ, 漱石全集第十二巻所収, 岩波書店, 1979年, 5-234ページ。
- 20) 三好行雄, 「こゝろ」解題, 別冊国文学 NO39所収, 學燈社, 平成二年, 57ページ。
- 21) 森田草平, 続夏目漱石, 甲鳥書林, 昭和十八年, 828ページ。
- 22) 伊豆利彦, 夏目漱石, 新日本出版, 1990年, 193ページ。
- 23) 小宮豊隆, 「こゝろ」解説, 漱石全集第十二巻, 岩波書店, 1979年, 244ページ。
- 24) 夏目漱石, 書簡, 前掲書, 59ページ。
- 25) 夏目漱石, 書簡, 同前書, 63ページ。
- 26) 夏目漱石, 書簡, 同前書, 71ページ。
- 27) 荒正人, 前掲書, 781ページ。
- 28) 夏目漱石, 書簡, 前掲書, 72ページ。
- 29) 夏目漱石, 書簡, 同前書, 76ページ。



- 30) 夏目鏡子 松岡譲筆録, 漱石の思ひ出（後篇）, 角川文庫, 昭和36年, 119ページ。
- 31) 松浦嘉一, 木曜会の思ひ出, 漱石全集日報第十三号, 岩波書店, 昭和4年, 7ページ。
- 32) 同前書, 8ページ。
- 33) 同前書, 8ページ。
- 34) 夏目漱石, 書簡, 前掲書, 86ページ。
- 35) 夏目漱石, 日記及断片, 漱石全集第二十六卷所収, 岩波書店, 1979年, 133-148ページ
- 36) 荒正人による学習院輔仁会の解説によれば, 明治二十二年に設立され, 教職員, 生徒達を包括した  
もの。
- 37) 夏目漱石, 私の個人主義, 漱石全集第二十一卷所収, 岩波書店, 1979年, 129-157ページ。
- 38) 同前書, 152ページ。
- 39) 同前書, 152ページ。
- 40) 夏目漱石, 書簡, 前掲書, 96ページ。
- 41) 夏目漱石, 書簡, 同前書, 97ページ。
- 42) 夏目漱石, 硝子戸の中, 漱石全集第十七卷所収, 岩波書店, 1979年, 123-198ページ。
- 43) 同前書, 198ページ。
- 44) 同前書, 198ページ。
- 45) 夏目漱石, 書簡, 前掲書, 110ページ。
- 46) 夏目鏡子 松岡譲筆録, 前掲書, 122ページ。
- 47) 同前書, 122ページ。
- 48) 北大嘉は「キタノタイガ」と読む旅館で京都市中京区本屋町にあった。
- 49) 一力（イチリキ）は京都市祇園町に現存する茶屋。
- 50) 大友（ダイトモ）は「一力」から500メートルほど離れた新橋にある茶屋。
- 51) 夏目漱石, 日記及断片, 前掲書, 150ページ。
- 52) 磯田多佳（1879-1945）は古川久編夏目漱石辞典によれば, 京都祇園の茶屋大友の女将で, 夏日の京  
都滞在中, 一中節や河東節で夏目を楽しませた文学好きの女性。
- 53) 夏目漱石, 日記及断片, 前掲書, 152-153ページ。
- 54) 同前書, 153ページ。
- 55) 夏目鏡子 松岡譲筆録, 漱石の思ひ出, 前掲書, 125ページ。
- 56) 同前書, 126ページ。
- 57) 夏目漱石, 道草, 漱石全集第十三卷所収, 岩波書店, 1979年, 5-230ページ。
- 58) 夏目が本郷千駄木に住んだのは, 明治36年3月より明治39年12月に本郷区西片町に移るまでの約4  
年間である。
- 59) 夏目鏡子 松岡譲筆録, 漱石の思ひ出, 前掲書, 130ページ。
- 60) 正宗白鳥, 夏目漱石論, 文壇人物評論所収, 中央公論社, 昭和7年, 83ページ。
- 61) 三好行雄, 「道草」解題, 別冊國文学 NO39（前掲）, 58-59ページ。
- 62) 大岡昇平, 漱石の帰結（三好行雄との対談）, 國文學漱石「道草」から「明暗」へ, 學燈社, 昭和61  
年, 26ページ。
- 63) 夏目鏡子 松岡譲筆録, 漱石の思ひ出, 前掲書, 131ページ。
- 64) 内田百閒, 私の「漱石」と「龍之介」（前掲書）, 20ページ。
- 65) 荒正人, 前掲書, 817ページ。
- 66) 夏目漱石, 書簡, 前掲書, 160ページ。
- 67) 夏目鏡子 松岡譲筆録, 漱石の思ひ出, 前掲書, 134ページ。
- 68) 夏目漱石, 書簡, 前掲書, 169ページ。
- 69) 夏目漱石, 日記及断片, 前掲書, 176ページ。
- 70) 夏目漱石, 前掲書, 175ページ。
- 71) 同前書, 181ページ。

**追記**

文中の引用文に用いられた旧漢字，旧仮名は一部を除き新漢字，新仮名に改めたことをことわっておきたい。